

# 離はなれていても



「もう仁ひとしくんには、転校のことは伝えたの。」

母の言葉で、ぼくの気持ちは重くなった。ぼくは、父の仕事の都合で来月転校することが決まっていた。そのことを、親友の仁になかなか伝えられずにいたのだ。

「そろそろきちんとなんと伝えた方がいいよ。」

母の言葉に、うかない顔でぼくは答えた。

「わかってるよ。一番最初に伝えたいとは思っているんだけど……。」

「仁くんとはずっと仲がよかったんだし、きちんとなんと理由を話せばわかってくれるわよ。」

母のはげましの言葉に、ぼくの不安も少しやわらいできた。

帰りの会が終わった後、ぼくは仁を呼び止めた。

「仁に話しておきたいことがあるんだ。実は来月、お父さんの仕事の都合で、転校することになったんだ。まだだれにも言ってないんだけど、仁は親友だし、一番に伝えたかったんだ。」

「……。」

仁は下を向いてだまっている。ぼくは話を続けた。

「前に九州に住んでいるおじいちゃんや、テレビ電話した話をしたことがあるって話したよね。今は、タブレットを使って遠く離はなれている人とも、近くにいますよ。話ができるんだよ。だからさ……。今までと変わらないよね。ぼくたちは一番の親友でいられるよね。」



すると、だまって聞いていた仁が急に立ち上がって言った。

「すぐ会えない。近くにいない。離れていたら、友達を続けるなんて無理なんじゃないかな……。」

仁はそのまま教室を出て行ってしまった。ぼくは、ただだまって仁の後ろ姿<sup>すがた</sup>を見ていた。

その日の夕方、ぼくは仁のことで頭の中がいっぱいだった。

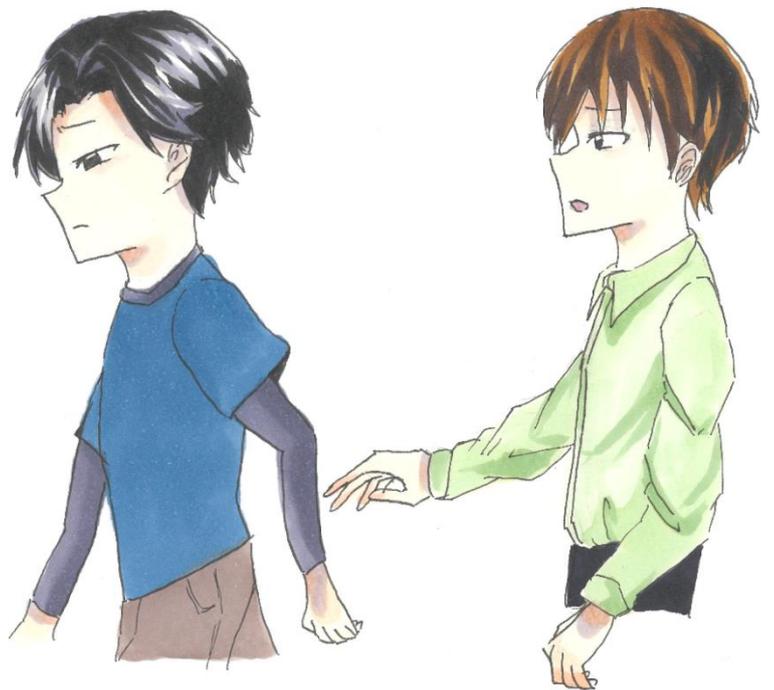
ぼくが部屋を出ると、父の部屋から声が聞こえてくる。ぼくは気になって、父の部屋をのぞいてみた。父のしているタブレットの画面には、何人かの人<sup>ひと</sup>が映っていた。どうやらオンライン上で会議をしているようだ。いつものおだやかな父とは少しちがって、仕事をしている時の顔つきになっている。

しかも、父は仕事の関係者と積極的に意見を言い合っている。時には大きな声で「いや、そういうことじゃなくて……」「つまり……。」と何度も同じことをくり返し説明している。ぼくは父の会議の様子をじっと見守っていた。

「今日はありがとう！すごく楽しい時間だったよ。」

オンライン会議が終わると、父は一緒に<sup>いっしょ</sup>話合いに参加していた人たちと、互いに感謝の言葉を伝え合っていた。会議を終えた父に、ぼくは、自分が不思議に思っていることを伝えてみた。

「お父さん。直接会えないと、言いたいことが言いつらいし、気持ちも分かり合えないし、正直関わりがぶらくないの？直接会って、目の前で話したり、ずっと一緒にいたりしないと、関係ってこわれちゃ





うんじゃないかなって思うんだけど。」

ぼくの顔を見つめていた父が、にこりと笑って話し始めた。

「目の前にいても、オンラインでも、相手のことを信頼しんらいしているからこそ、言い合えるんだよ。遠く離れていたって、相手に伝えたいとか、相手を大切にしたいという思いは伝わるんじゃないかな。」

父の言葉を聞いた時、ぼくの頭の中に真っ先にうかんだのは、仁のことだった。

「お父さん、ありがとう！」

そういうとぼくは、自分の部屋でスマートフォンを取り出し、仁に電話をかけた。

三ヶ月後、新しい町の、新しい学校生活にぼくもだいぶ慣れてきた。今日も新しくできた友達とドッジボールで盛り上がった。家に帰ってきたぼくに、父が声をかけた。

「今日は学校楽しかったか？」

「すごく楽しかった！そうだ、今日はこれから同じクラスのドッジボールのメンバーと、仁も入れてオンラインで作戦会議するんだ！」

と明るい声で答えるぼくを見て、父も思わず笑顔になっていた。

「離れていても、だな。」

父のその言葉を聞いて、ぼくは遠く離れた遠い場所で、自分と同じような笑顔の仁の顔を思いうかべていた。